罗兴典　编译

春风文艺出版社

日汉对照

精选
河邨文一郎诗集

如同呛人的肌香袭来
你纯洁的双唇跃动着
逼近我的眼下
当我预感背叛的叫喊
欲从唇间泄漏的瞬间
你的唇，堵塞了它
苦涩，毒汁般从我的口中
注入你的喉嚎
闭住了双眼

——接吻

春风文艺出版社

精选 河邨文一郎诗集

● 罗兴典 编译

春风文艺出版社

精选　河邨文一郎诗集

〔日〕河邨文一郎 著　罗兴典 编译

春 风 文 艺 出 版 社 出 版 发 行

（沈阳市和平区北一马路 108 号　邮编 110001）

丹东印刷厂印刷

开本：850×1168 1/32　字数：120 千字　印张：5.875　插页：2

印数：1—3000 册

1999 年 9 月第 1 版　　1999 年 9 月第 1 次印刷

责任编辑：邵　丹　　责任校对：唐惠凡

封面设计：冯少玲　　版式设计：马寄萍

ISBN 7-5313-2156-4/I・1875　　定价：15.00 元

自序

河邨文一郎

このたび私の詩選集が中国で出版されることになった。翻訳者は大連外国語学院の羅興典氏で，近年，日本現代詩の中国へのすぐれた紹介者として有名な碩学である。一九九四年十二月に，北海学園大学の千葉宣一教授の紹介で札幌で初めてお会いしたが，そののち私の詩をいくつも翻訳して『詩刊』『訳林』や『外国文芸』などの文芸誌に掲載して下さった。特に，一九九六年，私が北海道文化団体協議会交流使節団団長として黒竜江省を訪問したとき編纂した『河邨文一部詩選』の翻訳の労に当られた。その羅氏の手によって私の詩選が今回新たに，しかも少年時代の習作からごく最近の作品まで，生涯を通観するかたちで編集され出版を見ることは，私のまことに大きな喜びである。

この機会に私の歩んできた道を手短かにふりかえってみたい。私が生れたのは一九一七年，北海道の小樽市で，父は東京帝国大学卒業の整形外科の多忙な開業医だったが，学究肌で，私にはまことに厳格な父だった。それに生母を一歳のとき喪ったので，世間並みの母の愛を知らずに育った。どんなに悲しいことがあっても訴えるひとがいなかったからであろうか，小部屋にこもってただ孤り，声を忍ばせて泣いた日のことをはっきりとおぼえている。小樽は港町である。父の病院の裏手には小さな裁縫工場や，貧しい労働者の家並が密集し，餓鬼大将の私は親しい友達らとともに，かれらの家と家族のなかに入浸りで育った。実生活のなかに自己形成の方法をまさぐり，不条理を社会——いや，むしろ人間自身に訴える文学の土壌がここにあったように私は思う。

一九三四年，札幌市の北海道大学予科に入学したとき，戦争の近づく気配を肌で感じた。軍国主義を日に日に強めてゆく政府の血なまぐさい弾圧がはじまり，『北大文芸』の編集部にいた私は，折しも「尽忠報国の大道」へ雪崩れてゆく学生大衆の動向に逆らって，戦争批判の文学を指向した。しかし，当時の「反戦」と「抵抗」には獄と死が背中合せにあり，しかも戦争批判勢力はすでに分断され，グループどころか個人ひとりずつが，蚤か虱のように圧し潰されてゆく状況だった。そんなとき，一九三七年だったが，東京の人民社から刊行された金子光晴の，大胆きわまる反戦詩集『鮫』が私に測り知れなく強い沖撃を与えたのである。私は東京に金子光晴を訪問し，自分の文学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を詩だけに絞る決心をした。やがて北海道大学を卒業して，東京大学付属病院に移って，金子さんをわが師と仰ぎ，頻りに訪ねるようになってからは，詩壇に出ることを断念した。作品は書き溜めるだけで公表せず，戦争に非協力の立場をどうやら守りぬき，幸運にも生命を完うして終戦を迎えた。

少年の頃抒情詩に出発し，ボードレエル，リルケへの傾倒を経て，金子光晴の深い影響下に骨格がつくられてきた私の詩が世上に迎えられたのは戦後だった。それまで書き溜めた詩篇を次々に発表し，「文字論」や「浮浪児論」など，当時「評論詩」と評された作品群も世に問うたが，二・一ゼネスト（敗戦翌年の反体制的大労働争議）流産ののちスランプ状態にあった私の詩に新しい段階へ踏み出させたのは，病院の研究室で実験中，試験管群に乱反射する夕日に眼を射られた瞬間だった。生命の合成を夢みる原形質学者のまなざしをわが目に実感し，物質の感情にめざめ，詩の新水平線に『物質の真昼』を位置づけた。

次の転機があったとすれば，それは一九五九年に米国のニューヨークに留学し，米国人の「実際性」に根底から震撼されたときではなかったろうか？ ムード，風俗性，呪文耽溺，手軽な詠嘆……やわな日本的文学論理が砕かれるのを痛切に意識した。功利主義や客観主義にまで徹底したリアリズムが詩の世界にほしい，と真剣に考えた。詩集『物質の真昼』から『ザ・ミッドナイト・サン』や『夕陽たち』を経て，最近の『シベリア』に至るプロセスは，いくらかこの目標に近づきえたろうか？ 実作者にはわかりに

くいことである。私がわかっていることは，結局，人間というものが，つくづく，しようがない生きものだとは思っても，どうにも好きでたまらないくらいのことで，しかも自分では生涯の課題のつもりでいる「やわでないヒューマニズム」とはどんなものか，まだ私にははっきりと見えて来ない。日暮れてなお道遠し，の思い切なるこの頃である。

自序

河邨文一郎

我的诗选就要在中国出版了。编译者是大连外国语学院的罗兴典先生。他在近年向中国译介日本现代诗方面很出色，是有名的学者。1994年12月，经北海学园大学的千叶宣一教授介绍，我与他初次在札幌相识，其后，我的诗便有多首经他翻译先后在《诗刊》《译林》《外国文艺》等文艺杂志上发表。特别是1996年，在我作为北海道文化团体协会交流使节团团长访问黑龙江省时，他不辞辛劳为我翻译了自编的《河邨文一郎诗选》。这次又经罗先生亲手把我的诗从少年时代的习作至最近发表的新作，以通览生涯的形式，重新编译出版，实在是我的一大喜事。

借此机会，我想简短地回顾一下我所走过的道路。我于1917年生在北海道的小樽市。父亲是个东京帝国大学毕业，成天忙于整形外科医业的大夫。他身为大夫，学究气

却很浓，是我名副其实的严父。加之生母在我一岁时便去世，从此我开始了失去常人享有母爱的童年生活。至今我还清楚地记得，也许是因不管遇到多么悲伤的事也找不到人倾诉，只得成天关在小屋里过着孤单、忍气吞声的日子。小樽是个港湾小镇，在父亲开的医院后面，密集着小小的缝织工厂和穷苦工人的住宅。我这个淘气鬼，与相好的朋友们一起，整天泡在他们的家里和亲人之中。我想，也许是在这种实际生活中，通过摸索自我形成的方法，找到了把世间的不合理诉诸社会——不，不如说是诉诸人类自身——的文学土壤。

1934年，在我考入札幌市的北海道大学预科时，就已痛感到战争在一步一步向我们走近。一天比一天强化的军国主义政府，开始了血腥的镇压。当时我作为《北大文艺》的编辑，面对学生大众倾向"尽忠报国大道"而不顾，把志向定在了战争批判文学上。然而，当时的"反战"和"反抗"，是背着牢狱和死亡而存在的，加之战争批判势力已经分化，不止团体就连每个人也像蚤虱般溃散。在这种状况下，东京的人民出版社，出版了金子光晴的极其大胆的反战诗集《鲛》，给予我不可估量的强烈冲击。那是1937年的事。我来到东京拜访了金子光晴，并决心把自己的文学定死在诗这根线上。不久，我从北海道大学毕业，分配到东京大学附属医院，从此拜金子光晴为师，并得以常常登门拜访。之后，停止诗坛活动，诗作只写下保存，不公开发表，始终严守不支持战争的立场，好在有幸保全了性命迎来战争结束。

少年时，我从抒情诗出发，历经迷恋波德莱尔、里尔克，以至受金子光晴的深刻影响，形成了我诗歌的骨架。战后，

我的诗又开始面世。以前写下的诗作，陆续发表出来。《文字论》和《流浪儿论》等作品群问世后，被时人评为“评论诗”。“二·一”大罢工（日本战败翌年的反体制大劳资纠纷）流产之后，处于无力状态的我的诗，开始迈上一个新的台阶。这是在医院研究室实验中，从我看到乱反射在试管群上的夕阳那瞬间开始的。那时，我只觉得梦想生命合成的原形质学者的视线在我眼里生辉，唤起我对物质的感情，使诗集《物质的正午》定位在诗的新水平线上。

提到下一个转机，那就是从1959年留学美国纽约，当我的心灵彻底为美国人的“实际性”所震撼时开始的。我的记忆大概不会错。当时，我的确痛切地意识到，情调，风俗性，耽溺咒文，浮浅的咏叹……脆弱的日本文学论理行将被摧毁。我开始认真地思考，在诗的世界里，希望推行以至包括功利主义、客观主义在内的彻底的现实主义。从诗集《物质的正午》，经《深夜的太阳》《夕阳群体》等，以至最近的《西伯利亚》，我的创作历程，是否多少可以说正在朝这一目标接近呢？这对实际作者来说是难以明白的。我所明白的是，总而言之，所谓“人”，尽管我一再对他认为是无可奈何的生物，但毕竟我非常喜爱他们，加之，现作为我一生的课题探索的“彻底的人文主义”究竟是什么，至今我还没有弄清楚。想到这些，不由顿生“日暮而道犹远”之痛感。

目次

自　序　　河邨文一郎

青年編/青年篇

接吻/接吻　(2)
囚虜/囚虏　(4)
自転車旅行/骑自行车旅行　(6)
南へ/向南　(10)
林間にて/在林间　(14)

反戦編/反战篇

四つ辻/十字路口　(19)
シンガポールの旗/新加坡的旗　(23)
一九四二年の日章旗/一九四二年的太阳旗　(27)
激戦の後に/激战之后　(31)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

現代編/现代篇

文字論/文字论　(36)
光と影/光与影　(59)
湖上の薔薇/湖上的蔷薇　(63)
物質の真昼/物质的正午　(67)
無名戦士の墓/无名战士墓　(73)
詩人の脳/诗人的脑　(79)
雪の朝/雪晨　(87)
一本のけやきの影/一棵山毛榉的影子　(91)
夕陽たち/夕阳群体　(97)
磁石/磁针　(103)
階段/楼梯　(107)
仮死/假死　(111)
北の森林/北方的森林　(113)
短詩四編/短诗四首　(118)
紅葉/红叶　(122)
赤トンボ/红蜻蜓　(126)

海外編/海外篇

サウス・フエリイ/南方・渡口　(131)
サハラ/撒哈拉　(135)
シベリア/西伯利亚　(150)

论河邨文一郎的生平与诗歌成就 / 河邨文一郎の略歴と詩業について　罗兴典/羅興典　(158)

青年編／青年篇

接　吻

むせぶがごとき肌のにおい襲いて
けがれなき唇はあえぎつつ
わが眼の下にせまれり。
裏切の予感するどき叫びとなりて
わが唇を洩れんとせし一刹那,
きみが唇,そをふさぎつ。
にがきもの,毒のごとくわが口より
きみがのどへ注(そそ)がれゆくよ。
眼をとじぬ。

接　吻

如同呛人的肌香袭来，
你纯洁的双唇跃动着，
逼近我的眼下。
当我预感背叛的叫喊，
欲从唇间泄漏的瞬间，
你的唇，堵塞了它。
苦涩，毒汁般从我的口中
注入你的喉嗓。
闭住了双眼。

囚虜

昨夜，あなたの寝巻を着て寝た。
やわらかな繊維と染料のにおいのなかから
あなたの体臭を嗅ぎ分けながら，ねむった。
においはひそかな汗にまみれて悲しく饐(す)え
私は夢の中でいくたびかむせんだ。
遠いひとよ。
ふたりのものだった夜々の愛慾の殻をまとうた
　私は，
あなたの皮膚を私のうえにじかに感じ，
いや，むしろ
あなたの肉体のなかにすっぽり入りこんだかの
　ように。
ああ，この悲しい朝，
いまは身うごきもならぬ
愛情の桎梏(かせ)。

囚 虏

昨夜，我穿着你的睡衣入寝。
从柔软的纤维和染料的香氛中，
辨闻着你的体香走进梦境。
体香沾满隐隐的汗味酸得可怜，
我在梦中好几次呛得伤心。
远方的人儿哟！
在以往两人生活的夜晚，
总是裹着爱欲之壳的我，
痛感你的肌肤贴在我身上。
不，毋宁说如同
整个儿钻入你的肉体中。
啊啊！在这悲伤的早晨，
我蒙上爱情的桎梏，
全身失去了灵敏。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com